

召喚したらスライム だった件

よと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一般枠で採用された人理継続保障機関“カルデア”の48番目のマスターとなった藤丸立香。

特異点Fへとレイシフトで飛ばされ戦力を確保しようと召喚サークルを立てて召喚を決定する。

出てきたのは、喋るスライムだった。

目次

スライム召喚！	1
例えスライムでも見た目で判断してはい	
けないと悟った	5
一難去つて	12
第4話	18
ところかわつてこちらの事情	28
ところかわつてこちらの事情その2	39
ついに決着	56
いざ聖杯へ	70
黒き騎士王	79
決着	93

スライム召喚！

俺は藤丸立香。

故あって人理継続保障機関カルデアのマスターをしています。

今現在俺は特異点Fで召喚サークルを立てて召喚を行いました。

カルデアへは広告で知って応募してみたなら才能があると抜擢されて飛行機を何本も乗り継いだ先の雪山の上に建っていたんだけど、長旅で疲れ果てた俺を職員の人たちは『とりあえず訓練だけ』といってシミュレート室に放り込まれて訓練を少しやらされて終わったあと説明会に行くよう言われたところで迷って眠気に誘われてそのまま夢の世界へダイブしました。

その時に起こしてくれたのがマシユキリエライトっていう、俺のことを先輩と呼んでくれる薄ピンク髪の短髪の女の子で、説明会に行きたいことと迷ったことを伝えると後に来た紳士服にハット帽を被ったレフライノール教授がマシユを案内につけてくれてなんとか管制室に行けたけど遅刻して、更にまた寝ちゃって途中でオルガマリーアニムスフィア所長に追い出されちゃいました。

それから仕方なくマシユに俺のマイルームに案内してもらって入って見たらゆるふ

わなお兄さんという感じのロマンニールアーキマン、通称ロマンさんがいてひと悶着あったけどいい出会いが出来たと思いました。

それからマシユは放送で管制室にいつちゃってしばらくするとロマンさんの方にレフ教授から管制室に来るよう通信があつてあわててロマンさんが行こうとしたときに管制室で爆発が起きたらしくすさまじい轟音が響きました。

いてもたつてもいられなくてロマンさんと一緒に管制室に行くともうそこは火の海の中で、崩れてきた瓦礫も相まって地獄のように感じました。

そんななか瓦礫の下敷きになっているマシユを見つけてなんとか脱出できないか頑張ったけど、ハッチも閉まって出れなくなつた状況で彼女は手を握って欲しいと言ってきたので俺は軽く了承するとなるべく優しく握りました。

せめてこの瞬間だけは苦しまないようにと。

『レイシフトを開始します。』

という放送とともに意識を失って気が付けば炎に包まれた街の中に立っていました。

突然のことで驚いたけどなんとか気を取り直してあたりを散策していると骸骨が襲つてきて必死に逃げました。

するとマシユの声がしたと思つたら身の丈より大きい盾を振りかざしてマシユは人間とは思えない動きで追つてきていたすべての骸骨を倒してしまいました。

話を聞くとどうやらデミ・サーヴァントというものになったらしく詳しい説明を後に骸骨に追われてたところを助けたオルガマリー所長に聞かせてもらいました。

ここが特異点Fという場所でこの問題を解決しなかったら人類が滅んでしまうという想像もつかないくらいな大事だけどなんとしてでも解決しろと所長に言われました。

といつても戦力的に心もとないので召喚サークルを立てて実際に召喚しました。

「聞いているの藤丸立香!!この大事な局面でなんてことをしてくれたのよあんたはー!!!」

と所長が騒ぎ立てるのも仕方ない。

俺も今ちょうど現実逃避していたところなのだから。

召喚されて現れたのは特徴的なボディとツルツとした水色の肌、誰もが知っている万国共通の生物。

「僕はスライムのリムル、悪いスライムじゃないよ。」

そう、なにを隠そうスライムでした。

「ハハハ、スライム、なんで?何でスライム?」

「フオーウ?」

『僕もスライムは初めてみたよ』

「もう終わりだわ！なにもかも！」

「これが、スライム」

俺は現実逃避、猫とリスが合わさったような生き物のフオウはスライムと見つめあつて、Dr. ロマンは只々感動したように声をあげ、所長はこの世の終わりといわんばかりに叫び、マシユは好奇心でスライムに近寄つた。

「えつと、ごめん？」

人の言葉を喋るスライムは一言、状況的に謝つた。

ここに、一匹のスライムがこの世界に降り立った。

例えスライムでも見た目で判断してはいけないと悟った

「えーっと、改めて自己紹介いいかな？」

おずおずと喋るスライムが俺に向かってそう切り出した。

「あ、うん。」

もうどうにでもなれ、と半ばやけ気味に了承するとよしきたといわんばかりにスライムは張り切って人化した。

.....

人化!!?!

「改めまして、俺はリムルⅡテンペスト。魔王だ。」

喋るスライム、リムルが人になり改めて自己紹介をする。

その容姿はうつつすらと青みがかかった長い銀髪に全体的に黒を基調とした服をまとっていた。

芸能人やモデルでもこんなに美しい人はいないと断言できるほどに整った顔立ちで、

人当たりの良さそうな笑みを浮かべてリムルはこちらに握手を求めようとスツと手を出してきた。

「……………」

『……………』

不覚にも、この場の全員がリムルに見とれていた。

「あ、あぁうん。藤丸立香、よろしく」

それこそ差し出された手に反応するのに間を必要としたほどにだ。

「おう、よろしく」

それを知ってか知らずか、たぶん分かったと思うけどにこりとまた笑みを浮かべてしつかりと握手をした。

「て、魔王?」

不穏な言葉が聞こえた。

それは、あれかな?世界の半分をくれてやるとか言い出したり、世界征服に乗り出したりするあの魔王?

「そうそう、俺の元いた世界の話なだけどき——」

「え、ちよつとまちなさい!」

リムルが説明をしようとしたところで所長が待ったをかける。

「あなた今元いた世界って、まさか世界間を超えて来たっていうの!!!」
 所長がヒステリックに叫ぶ。

そんなにもすごいことなのだろうか？いや勿論世界を移動できるなんて本当にすごいことなんだけど、そこまで大げさになるようなことなんだろうか、と疑問に思ってしまう。

そう聞くと所長は、

「あんたねえ．．．、全く、これだから一般枠は．．．。あのねえ、世界間を移動するなんてそれはもう魔法の領域よ、あの第二魔法の使い手であるキシユア・ゼルレッツチ・シユバインオーグ宝 石 翁 と同じようなことができるってこと。．．．て言ってもわからないでしょうね」

所長が呆れたように言う。

全くその通りで、今の話の半分くらいしかわからなかった。

まず魔法と魔法の違いとは一体．．．。

『立香君、ようするに僕らが歩いて移動することに対して、あちらは瞬間移動で移動できる感じだよ』

とDr. ロマンが教えてくれた。同時に納得する。

とんでもないや。

「もうこの際あなたが戦えるんならスライムでも魔王でもなんでもいいわ。さぞ強い英霊なんでしょうね」

「そのことなんだけどき、多分俺英霊じゃないんだよね」

え？

それってどういうことなんだろう？

『それはおかしい。今行われた召喚は英霊を召喚するためのものだ。君の世界間移動の道しるべじゃない。それにサーヴァントとしてのデータだってこつちに記録されているんだよ?』

「言いたいことはわかるよ。かなり特殊なのは理解してる。簡単に説明すれば、運悪く藤丸の召喚に割り込む形で世界間移動が発動してサーヴァントの枠組みに収められそうなどころを弾いて無理やり召喚されてる感じだ。だから俺は生身だしサーヴァントの契約からはちよつと、いやかなり外れてる。」

「はあ!!?」

所長がまたすごい驚きを見せる。ハトが豆鉄砲を喰らって更に追い打ちを喰らったような顔してる。

「そんなことが可能なの!?! ああ、でも世界間移動を実現できるようなヤツだし有り得ないわけじゃないのかしら——」

「俺ぐらいじゃないかな？あ、でもヴェルドラならできるかもな。因みにその辺の知識は聖杯？からぶんどってるから大体の事情はつかめてるぜ。」

とんでもない人、いやスライムだ。

所長から聞いた説明は召喚時に聖杯から知識を与えられるものを彼？彼女？はぶんどったって言ってるし、これは戦力的に期待できそう、というかそれはもうスライムってレベルじゃねえ。

あ、そういうえばここに大分留まっているけど大丈夫なんだろうか？

「あはは、とりあえずその辺の事情は——」

後にしてここを離れよう。

そう言おうとしたがもう遅かった。

「フフフ、見つけましたよ。さあ、殺しあいましょう？」

瓦礫の上、丁度俺たちを見下ろす形で禍々しい雰囲気を持つサーヴァントが鎌のような槍を構えてこちらを見下ろしていた。

もう、逃げる猶予はない。

そう悟るのに時間はそれほど必要としなかった。

「ランサーのサーヴァント!!?」

所長が真っ先に叫ぶ。

『しまった、気づくのが遅れた。みんなごめん、なんでいるかわかんないけどサーヴァントだ。なんとかして逃げるか撃退するんだ!』

「ちよつとロマニ!こんな大事な時になんてことをしてくれたのよ」

『すみません!ですが、彼女の実力をみるいい機会だと思えます。』

確かに、リムルの力を測るのには丁度いい相手だと思っただけ相手はサーヴァント、一筋縄ではいかないだろう。

でも、リムルは自身を魔王とってたしそれなり以上に強いかもしれない。

「リムルさん、任せられる?」

「おう、任せとけ。それとさん付けはいいよ、あと敬語も。堅っ苦しいのは苦手でさ。」

「あなたが相手ですか?いいでしょう、優しく殺してあげます。」

ペロリと舌なめずりをして槍の英霊、ランサーは腰を落として狙いをリムルへと定める。

「悪いけど、こういうのは手早く終えたいんだ。しかも相手をしてやれるほどの実力じゃないし。」

「舐めたことをいつてくれますね、精々後悔して死になさい!」

するとランサーは目にも止まらぬ速さで突進するかのようになりムルへと向かっていく。

それはまさに新幹線のような超高速でこちらからは消えたように見えた。

「神メキト之怒ト」

リムルが眩く。

一瞬、キラリと眩い光が目映った。

「え？」

俺とランサーの声は重なった。

なぜなら、もう勝負はついていたからだ。

ランサーの体には、焼けたような穴がいくつか空いていてそれは致命傷だと見ただけでわかった。

「ナ……にが……」

何も理解できないまま、ランサーはそのまま光の粒となって消えた。

後に残ったのは、バツの悪そうな顔をしたリムルと俺たちカルデアの面々のみだった。

「やっぱちよつと大人げなかったかな？」

リムルの一言がやけに静かなこの場所に響いたきがした。

一難去って

「い、今のは…」

俺は戦慄していた。

今の一瞬だけでランサーを穴だらけにした攻撃のすごさを実感した。

あれがどういったものかはわからないけれど、とても強力なものだということは分かった。

「うーん、もうちよつと手加減すればよかったかも」

などとリムルは言う。

その言葉の通り、今の攻撃でも十分に手を抜いていたということはさっきの態度で直感していた。

とすると俺は破格のサーヴァントを引き当てたんじゃないか？

最初はスライムが出てきて焦ったけどその実、リムルという名前があつて、魔王で、あんな一瞬で敵を倒せるようなとんでもないヤツだった。

「そっういえばリムルってクラスはなんなの？」

ふと気になってそう聞いてみた。

大事なクラスをまだ聞いていなかった。

これをまず知らなかったらマスターである俺の役目を發揮できない。

「ああ、一応キヤスターらしいよ」

キヤスター。

それは聖杯戦争で最弱と評されることが多いクラスだと所長の説明で聞いた。

なんせキヤスターといえれば作家の英霊が多く所属していたりするクラスらしくて引き当てても戦力として全く使い物にならないことだって珍しくないとか。

なるほど、リムルにはある意味ピッタリなクラスかもしれない。

外面に踊らされて本当に大切な中身を知らぬままに触ってみたら、実は中身は爆弾でしたくみたいなのりだ。

まったくシャレにならない話である。

「とりあえず、ここを離れた方がいいね。俺は平気だけど、藤丸や他の人はそうじゃないだろう?」

「はい、そうですね。私もデミ・サーヴァントになったのはいいのですが、この英霊の真

名も宝具もわからなくて……」

マシユは申し訳なきそうに言った。

ひどく悔しそうな顔をしていて、こちらにもその齒がゆさが伝わりそうだ。

何か声をかけようと歩み寄ろうとする。

その時、

「あ、それはそうとそこで隠れてるヤツ、出てこいよ」

何の気なしにリムルは俺たちの背後にそう言い出した。

「やっぱバレちまつてたか」

すると隠れていたのか、青いローブを着て大きな木の杖を持った一人の男が俺たちの背後から姿を現した。

『な、サーヴァント反応!? そんな、今度はきちんとモニターを確認していたのに』

ロマンが例のごとく驚いているけど実際に目の前に現れたんだから仕方がない。

「いつから気づいてたんだ?」

「勿論最初からだ、こつちの様子をうかがってるみたいで敵かどうか迷ってたけどまだ話分かりそうので助かるよ」

やっぱリムルはすごいや。

カルデアの索敵能力だつてすごそうなのに、それをあつさりと上回つて見せている。なんか強がつてるように見えるけど多分気のせいだね。うん。

「それで、こちらとしては今ここで起きてる問題を解決したいんだけど、そつちはどうするんだ？」

リムルはローブの男にそう問いかける。

本来、そういう交渉は所長や俺がやったほうが良さそうだとは思うけど、今場の主導権を握っているのはリムルで、俺たちはまだそれを傍観しているだけに過ぎない。

下手に口をだして状況を混乱させるわけにはいかない、というのはこの場で一番無知な俺でも分かる。

それを所長もマシユもわかっていいのか黙つて男の返答を待つていた。

「テメエらと敵対するメリットが無え。それに、今の聖杯戦争を終わらせるつつう俺の目的とテメエらの目的は合致してる。だからできれば協力したいと考えてるんだが……」

そうローブの男は含みのある言い方をする。

そして、俺たちへと視線を移す。

「あんたの力は十分伝わった。だが、後ろのヤツらのことは何にも知らねえんでな、実力が知りたい。」

「つまりは俺だけ出しやばっても他が期待出来なきや意味が無いというわけだ。」

「まあそういうこつた。お荷物を3つも背負い込むなんざ俺はゴメンだからな。」

「わかつた、そういうことなら俺からは文句ないよ。後は藤丸達が頑張ることだから
そう言つてリムルはこちらを向いて清々しいほどの笑みを浮かべて

「んじゃ後よろしく!」

と言つてこちらに丸投げしてきた。

「ちよ、そんな丸投げされても!?!」

「でも、俺ができそうなのは応援くらいだしさ、マスターである藤丸はサーヴァント
のマシユに指示をすればいいさ」

リムルはそう言うや否や近くの丁度いい瓦礫に腰掛ける。

どうやら完全に傍観を決め込む姿勢のようだ。

「話が早くて助かるぜ。んじゃ、こつちはこつちでおつ始めますかね。さ、構えな嬢
ちゃん。でなきやそつちの坊主を今から殺すぜ。」

スイツチが入つたように、男を取り巻く雰囲気殺気立つた鋭いものへと変わった。
本気でこちらを狙っている。

「マシユ!」

「ハイ!」

それをマシユも感じたのかすぐさま前が出る。
こうして、俺とマシユの、初めて本当の意味でのサーヴァント戦が始まった。

第4話

「アンサズ！」

マシユと男の戦いは男の先制で始まった。

言葉と同時に完成させた文字列が形となりボウリングの球くらいの大きさの火の玉になつて高速で飛来してくるのだ。

すさまじい熱と衝撃で盾を構えたマシユもたじろいでいる。

いや、これは違う。

多分、俺がいるからだ。

俺がいるから、マシユはその場から動けないんだ。

動けば、あの火の玉に黒焦げにされるのは俺だからだ。

「クソ……」

その事実が悔しくて、齒噛みする。

こうしている間にも男、攻撃手段からしておそらくキャスターの攻撃は勢いを増していく。

2つ、3つと来ていた火の玉はいつしか5つ、6つへと数も、その速度も増していた。

更にはキャスターは点の攻撃から面の攻撃、すなわち移動しながらでもこの攻撃を仕掛けている。

それをマシユはいち早く気づいてなんとか俺と火球の隙間に入って盾を構える。

「ぐ、ううううう…」

それもかなりぎりぎりのようで顔を見なくてもその表情は苦悶を浮かべていることだろう。

「そろそろどうした！攻めてこれなきやその坊主共々丸焼きだぞー」

挑発しながらも更にダメ押しといわんばかりに火の玉を量産し、一筋の流星がごとく一気に発射する。

「きゃあああ!!!」

その攻撃でついに耐え切れなくなったのか、ついにマシユは後ろに吹っ飛んでしま
う。

「マシユー！」

キャスターは俺たちの実力を知らないと言って、こちらを試してきた。

その真意はわからないけれど、今はマシユがピンチなんだ。

俺とそう歳の変わらない少女なんだから、この戦いだって、さっきの骸骨との戦いだって、とても怖かったはずなんだ。

怖くて、怖くて、怖くて仕方がないはずなんだ。

でも今はそれを押し殺して、俺のために戦ってくれている。

何もできない、こんなふがない俺のために、戦ってくれているんだ。

なら、少しでもそれに応えるというものが、俺というマスターの役割なんだ。

こんな俺でも、できること。今の状況で出来る事、やるべきことを成すのがマスターの、俺の役割であり役目。

まず、俺が戦うという選択肢。

これはありえない。

戦おうとすれば、魔術もろくにできない俺は近づいて殴るといふ行為くらいしかできない。

そのためにはまず、近づかなければならない。

だがそうしようと走りだせばすぐさま火の玉によって丸焦げになってしまう。

だからそれ以外の選択肢を選択する必要がある。

この場面で俺が成せることといえば、それは――。

「マシユ、大丈夫？」

「先輩…、はい、まだやれます、ですから先輩は下がっててください。じゃないと先輩を守れません…。」

「うん、わかってる。けどマシユだって一人の女の子なんだから、無茶はダメだ」

「でも、それでは先輩を守れません！それに、私はサーヴァントです！」

「でもだからってマシユが無茶をしていい理由にはならないはずだ」

「それは…。」

「俺が指示をだす。マシユはそれに従ってくれ」

「！」

「それが、マスターの役目なんだろう？」

「…はい！マスター指示を！」

それは、マスターとして、自分のサーヴァントを支えることだ。

「どうやら、腹は決まったようだな。ならいくぜ！」

待っていてくれたのか、キャスターは先ほどの場所から移動もせず、攻撃も加えてこなかった。

「いくよ、マシユ！」

「はい、マスター！」



おもしろいやつがいる。

最初はそんな好奇心から来る興味に惹かれてこの地獄のように成り果てた冬木の街を
持前のルーン魔術で気配を絶って移動していた。

お目当ては今さつき召喚された奇妙な魔力を持つヤツだ。

なんつうか、コイツのことはつきりと化け物じみた強さだと理解はできるが、気配
はどこか空虚なもので何故か逆に大したこと無いヤツだと感じる。

頭の方と自身の経験から来る勘の方とで下した判断が矛盾していることに違和感と
恐怖を覚えた。

こんな感覚は英霊になってからでも初めての感覚だった。

圧倒的強者と向き合っている感覚と、圧倒的弱者と向き合っている感覚が同時に襲つ
ているのだ。

それを警戒しないわけがない。

丁度いい具合にランサーがアイツに仕掛けていった。

泥に侵され通常のサーヴァントよりも宝具が使えないという致命的な弱点をもち、正
常な判断が下せなくなっているあの状態でも、アイツの戦力を測るには十分だろう。

そう楽観的に考えて行く末を見た。

だがそれは甘すぎたと5秒もたたずして理解した。

かろうじて目視できたのは、いくつもの光の筋がランサーの体を貫いた一瞬のみ。何が起こったのかはまるで理解できなかった。

強いなんてもんじゃねえ。ありやたとえ万夫不当の英雄王でさえ片手で相手できるような神に等しい化け物だ。

そう感じた。

だが、少なくとも敵ではないことは分かった。

メンツを考えるに聖杯を競い合っていたセイバーのヤツらよりは話がわかりそうな相手だとわかるからだ。

だが、今出て行ったところで敵とみなされるのが関の山。ならもう少し待って話が通じる相手だと理解させたうえで協力をを築けばいい。

そうすればこのくだらねえゲームを終わらせることができる。

そう考え、しばらく身をひそめようと少しずつ距離をとっていたその時、ヤツと目があつた。

「！」

バレたか？

だが今俺はルーン魔術で姿も気配も極力消している。

このクー・フリーンたる俺がそう易々とへまをやらかすわけはねえ。

だがこういう場合は疑ってかかった方が良い。

バレた場合とバレなかった場合を想定する。

勿論、バレてねえ方がいいが。

「あ、それはそうとそこで隠れてるヤツ、出てこいよ」

：ハア。

「やっぱバレちまつてたか」

声をかけられたんじゃあしかたねえ。

話を通じそうな相手なんで、わかってくれるとは思いますが、コイツと協力するのは全く悪い話じゃねえ。

むしろ大歓迎だ。

ただ、問題はそこの坊主と嬢ちゃんだ。

令呪があることからしてマスターなんだろうが、恐らくこういったもんを一切経験してねえ一般人といったところか。

あの嬢ちゃんやんは英霊と呼ぶにはちと違和感がある。

なんつったつくな、あれだ。

デミ・サーヴァント。

人間と英霊の融合。

だが反応と表情からしてこれが初陣だ。

ようするに、きちんとしたマスターとサーヴァントつつう関係がまだ成り立ってねえんだろうな。危なっかしいったらねえ。

ここはひと肌ぬいどくか。

協力関係云々よりも荷物3つ抱えんのはごめんだ。

そう考えてキャスター、クー・フリーンは話し合いを開始した。

結果、クー・フリーンが一番理想とした形に状態を持つていくことに成功。

あちらがこちらの思惑を察して乗ってくれたこともその一助となった。

だからこそ、キャスター、クー・フリーンは協力するうえで的心残り、藤丸立香とマシユ・キリエライトの煮え切らないマスターとサーヴァントの関係を確立させようと戦鬪を吹っ掛ける。

宝具こそ使わないが、戦鬪の運びから火球の勢い、数、火力といった諸々の攻撃には一切の躊躇、手加減などはなかった。

それこそ、マシユが藤丸を守りきれなければ即丸焦げになるだろう。

そして、戦いはマシユが吹き飛ばされたところで一旦止まる。

藤丸がマシユに何かを話しているのもそうだが、クー・フリーンはそれ以外に気が逸れていた。

一瞬、ランサーで召喚された自分でもわかるかどうかの刹那にも似たほんの一瞬、何かと因縁のある相手、赤い外套のアーチャーが弓を向けてこちらに矢を放った気がしたのだ。

それに気が逸れ、つい辺りを警戒してしまう。

だが、周囲に映るのはさきほどとなんら変わらない炎の中にある冬木の街の風景のみ。

戦闘が始まる前、それも興味があると感じた例の青みがかった長い銀髪の少女とも女性ともとれる背丈に美しい容姿をもった規格外バゲモノが召喚された頃からこの場所を動いていない。

だからこそ、あのアーチャーはこちらを狙うだろうと確信していたのだが、どうやら杞憂に終わったらしい。

現在、アーチャーが矢を放ってくる心配はない。

ならば、目の前のことに集中するのみ。

（坊主と嬢ちゃんの話もそろそろ終わりそうな頃合いか、ならこいつはどうだ？）
ルーン魔術で火球を大量に生産する。

そしてそれは次第に一点へ集まり、さきほどのボーリング球ほどのサイズとは比較にならないほどに巨大化していく。

形成されたのは巨大な炎の球。

たとえかすつただけだとしても大けがは免れないだろうと感じれるほどの熱とエネルギーを有していた。

「どうやら、腹は決まったようだな。ならいくぜ！」

その言葉とともに豪火球とも言うべき巨大な炎はマシユへと向かっていった。

ところかわってこちらの事情

その日、俺とヴェルドラとラミスは迷宮の最奥の間に設置された異世界への扉ディファレントゲートに集まっていた。

ヴェルドラとラミス、それからベレッタが一足先に異世界へと交流しに行つてからしばらくの時間が過ぎ去つた。

ヴェルドラ達が交流した世界と異世界への扉ディファレントゲートのデータをまとめて調整と改善を行い今回は、満を持して俺、リムルⅡテンペストも異世界へ遊びにいけるのだ。

これに高揚せずしてどうする！

前世は人間、今世はスライムとして転生した俺だが、その前世の頃からこんなことが出来たらいいなと夢にまでみたもの。

今この状態でも若干叶っているかもしれないが、そう、異世界旅行だ。

例えばこの世界みたいに魔法が存在する世界へ行つてみたい。

例えば前にヴェルドラ達が行つたように科学力が異常発達した世界へ行つてみたい。人間が存在しない世界へ行つてみたい。e t c …。

そんなことが叶うのだ。これを一人の男として、ロマンを追い求める一人の男として興奮しないわけがない。

そう、今俺のテンションは最高にハイってヤツだ。

勿論、俺にも威厳があるので表には出していないが。

《……》

シエル先生が呆れているように感じるが多分気のせいだろう。：気のせいだったら気のせいだ。

今回の異世界旅行に同行するメンパーはヴェルドラ、ラミス、クロエ、ディアブロ、ベレッタ、シュナ、そしてミリムとガイアの計8人と一匹だ。

俺、ヴェルドラ、ラミスは言わずもがな、行くのは決まっていた。

クロエとシュナはどうしてもという強い要望もあり同行をゆるしたが、ディアブロに至っては秘書の務めですのだからと言ってシオンとの過激な争い——最終的には俺が審判をしてスキルなし技量なしの目隠しじゃんけん——を繰り返してディアブロが勝利したことで同行することになった。

そしてベレッタには、前回ヴェルドラ達に巻き込まれて異世界へと渡った経験を買って俺が誘った。

しかし、問題はミリムに俺の『異世界へ遊びにいらこう計画』がバレて一緒に行きたい

と駄々をこねられたことだ。

当然、俺は構わないが問題はその期間中ミリムが執務をできないことだ。

その結果フレイのお怒りを受けるのはこの駄々に屈した俺とこねたミリムになる。

俺の場合はこのしばらくの間で執務に区切りをつけており、ここ数週間から1か月の間くらいは俺がいなくてもソウエイやベニマル等他の面々で——それこそユウキのように世界を滅ぼすような敵が来ないかぎりは——対処可能などころまでは落ち着いている。

勿論俺は広大な土地を治める魔王であり国の統率者なのだからそういった書類仕事はやつてもやつても追いつかないのだがそこはご愛嬌だ。

だが、ミリムの場合こうはいかない。

ライカンスローフ ハーレイ エンジェル
獣人族、有翼族に続き天魔族の合計三種族を統べる魔王となったミリムは今まで

上に多忙となり、前のように執務から抜け出すことが難しくなっているようで、それに伴いフレイの監視も一層厳しくなったとか。

つまり、前々から行く予定を立てて準備を進めてきた俺たちと違ってミリムには遊ぶ余裕と暇がなかったのだ。

だがここでミリムを置いて俺たちだけ楽しむというのかわいそうだ。

そう思った俺はミリムと一緒にフレイへ直談判をしたのだ。

その時のミリムなんか、

「おお！ありがとうなのだリムル！持つべきものはやはり親友マブダチなのだな！」

なんて言つて俺のことを救世主を見るような目で見つめて崇められた。

それで肝心の直談判の結果だが、なんと条件付きならばと許可をくれたのだ。

これには俺もミリムも大いに喜んだものだ。

だが、その条件がキツかった。

条件というのは、まず、俺の執務を聞いてきたところではまだわからなかったが、次の条件を言うところで察した。

つまり、俺の執務は1カ月くらいなら俺無しでも回るように破竹の勢いで仕事を進めた。

それを、予定まで残り数週間のところで1か月分の執務を終わらせることが条件だといったのだ。

まんまと上げて落とされたものだ。

かなり長い期間から準備をしてきた俺でさえキツかったのをミリムは残り数週間で完遂しなくてはならなくなった時のミリムの顔は既に真っ白だった。

ご愁傷様と、心の中で思ったのはここだけの秘密。

だがこれ以上俺が介入することはできない。後はミリム達の問題だからだ。

そしてそれからミリムの参加は半ば諦めていたが、なんとさつきミリムは超特急で魔物の国へと飛んできたのだ。

「やああああああっつと!!!終わったのだリムル!!!」

とはその時に清々しいほどにやり切ったような笑顔で言った言葉だ。

ミリムは俺が領を出た後にそれこそ残像が見えるような速度で一気に溜まったていた執務を済ませてここへやってきたそうだ。

付き添いでついてきたフレイによると、速度に任せただ当なものではなく、一つ一つの資料に的確な指摘をしつつ判子を押したり、却下するにしてもしつかりとした理由と事情、都合に合わせた内容も綴っていたらしい。

不覚にもその力が欲しいと思った瞬間だった。

そんな急ピッチで進めても的確かつ正確な処理ができることに色々敗北を感じた。なんか悲しい。

《私が本気になればその程度五日で終えれます》

え？

ばかな、あの量の書類にそんな芸当を繰り広げるなぞたとえシエル先生でも不可能だ

!

《虚空^{アザトリス}之神の能力をフルに私が活用すれば可能です!》

なんという意地、だが本当にできそうに思えてくる不思議。

こうして、ひと悶着あつたがミリムとガイアが同行することになった。

ガイアは、このしばらくの間に姿はまだ幼体といった感じだが、ある程度片言でも喋れるようになっていた。

ガイアの場合、いい経験になると誰からも反対意見は出なかつたが、一部からは——
——主に姉二人に——反対こそでなかつたものの「傷の一つもつこうなら・・・」とすごい殺気を送られた。

因みにガイアは女の子でヴェルドラなんかは、

「我にもついに妹ができたか」

などと言つて感傷深くなつていて、ついこの前までは姉に構われていて嫉妬していたが今では本当にかわいがつている。

見事な手のひら返した。

姉二人なんか更にかわいがりに磨きがかかつていたし。

閑話休題。

中々の人数になつたが、これはこれでいいものだ。

前々からみんなで遊びに行ければと思つていたので丁度いい。

ゆくゆくは知り合いも読んで本当に何十人で遊びに行つてもいいな、そう思った。

「リムルよ、準備が完了したみたいだぞ」

ヴェルドラがラミリスの調整が終えたのを見て俺に声をかけてくる。

「よし、行くか。」

そして俺の声で全員が魔法陣の中に入ったのを見て俺が魔力を込めようとすると、

「リムルよ、我にやらせてくれぬか？」

とまるで子供のようにヴェルドラが詰め寄ってきた。

聞けば自分は経験があるからここは任せてくれとかなんとか。

だが俺にはどうにも率先して何かを中心的にやりたがる小学生にしか見えなかった。

まあ、経験があるのは本当だし注ぎすぎも怖いしここはヴェルドラに任せてどんな感

じか見て学ぶとしようか。

そこはかとなく不安だが、俺はこれに了承し気前の良くなったヴェルドラは喜々とし

て魔力を注いでいく。

「おお、ついにワタシも異世界へ行けるのだな！」

「ボクも、たのしみ」

「次はどんな世界かわくわくだね、師匠！」

「クアアアアアハッハッハ！全て我に任せておけ」

「クフフフ、いざ世界を渡ろうとなると私も高揚を隠せませんね」

「ふふふつ、あちらの世界にはどのような食材があるのか気になりますね、リムル様」
「違う世界にはどんなものがあるのか楽しみだね、先生」

「今回はラミリス様に不憫な思いをさせずに済みそうでなりよりです」

ミリム、ガイア、ラミリス、ヴェルドラ、ディアブロ、シユナ、クロエ、ベレッタはそれぞれ次に目にする世界に思いを馳せる。

俺も楽しくまったりできるような旅行がいいと考えた。

だが、

ピシリと、魔法陣から輝く光にヒビが入ったような感じがした。

「ぬ？これはー！」

魔力を流していたヴェルドラが真つ先に気づくが、もう事態は光にヒビが入った時点で終わっていた。

俺も虚空アザトース之神を起動して事態の收拾を図ろうとするが、やはり一歩遅かった。

「みんな!!」

俺が声を出した時点でもう時間切れだったのだろう、ヒビは完全に俺たちを隔離しそのまま砕け散った。

周りを見渡してみても砕け散った光の残滓と何も無い、只々何も無い空間がそこに広がるだけだった。

《マスター、デイファレントゲート異世界への扉を起動したのと同時に渡るはずだった世界でも似た召喚が行われたようです。私たちはその召喚に運悪く異世界デイファレントゲートへの扉で干渉してしまつたがために個別に隔離されたようです。》

今はそんなことを聞きたいんじゃない、みんなは無事なのかそうでないのかだ。ことの顛末なんてみんなを救つてからでも話せる。

みんなは無事なのか？

《100%無事です。それぞれ今の主様マスターと同じような空間にいるかと思われます。全員を救い出そうにも今はこの世界の情報を収集するべきかと》

シエル先生が100%と自信を持って言い切つた。

みんなが無事なら、今はそれでいい。

完全に分断されたにもかかわらずシエルは超然として俺が一人不安になつて焦っているのもばかばかしくなってくる。

旅行にトラブルはつきもの、みたいな考え方で今は大丈夫そうだ。

《それでこそ、我が主マスターです》

それで、いつまでここにいればいいんだ？

でようと思えば出れると思うが、シエルが情報収集と言つていたのでこの何も無い空間でも得られる情報があるのか？

《解析完了。この世界で今起きている状況を完全把握することに成功しました。どうやら、人類は今しがた滅んだようです。外的要因で。》

は？

滅んだ？

今？

人類が？

まって、外的要因で今、人類が滅んだの？

《はい、捕捉するとこの世界は主様の^{マスター}前世におられた世界に酷似しているようです》

まずこの場所ですらやってその情報を得られるんだろう。

そう疑問に思った瞬間、体の上にグンと引っ張られるような感覚がした。

《どうやら、主様が^{マスター}召喚されるようです。時間がないので得た情報を整理して思念で送ります》

そういつてシエルに送られてきた思念で全て把握した。

俺が^{ディファレントゲート}異世界への扉で今いる場所、英霊の座へと事故で来てしまったこと、それによって俺が疑似的な英霊として登録されてしまったこと、シエルがそれを拒絶してうまくこのシステムに干渉したこと、そして、俺が召喚される場所の状況と聖杯、聖杯戦争についての知識とその時代の知識+ α 。

そして、目の前に異世界^{ディファレントゲート}への扉に似た光があふれた。
俺はそれを念のためスライムの体に戻って召喚される時を待ったのだった。

ところかわってこちらの事情その2

召喚されたことを自覚した。

辺りには俺が召喚された残滓であるのか魔素が多少舞っていて、この世界にはある程度の魔素があることを教えてくれる。

見渡せば俺を召喚したのであろう黒髪蒼眼の少年、その隣に居るのは鎧のようなものを着込んだ薄ピンク髪の少女と銀髪で見るからに高圧的な見た目をした美少女がいる。

初対面の人とはファーストコンタクトが一番大事だ。

なるべく印象に残るようなユーモアのある自己紹介をしよう。

と、思った時ひらめいた。

最近使っていないかったあの自己紹介があるじゃないか！

思い立ったが吉日。

今やるしかない！

「僕はスライムのリムル、悪いスライムじゃないよ。」

場の空気が凍った。

あれ？おかしい。

多少狙いすぎた自己紹介だとは思ったがここまで淡泊？

ちよ、まずい、やらかした。

まさかここまで滑るとは思ってたなかつた。

「藤丸ううう!!」

すると黒髪の少年に銀髪の美少女が嘔みつく。

ふむ、どういふことなのか状況がよくわからない。

今の状況を鑑みるにまず、俺が召喚に呼ばれる。次に俺のことを少年達が見るや否や、銀髪の美少女が少年に掴みかかってなにやら文句(?)を言っている。

俺放置。

なるほどわからん。

「ハハハ、スライム、なんで？何でスライム？」

「フオーウ？」

『僕もスライムは初めてみたよ』

「もう終わりだわ！なにもかも！」

「これが、スライム」

「えつと、ごめん？」

めっちゃ混乱していらっしやる。

とりあえず謝っておこう。

まず、なんで俺呼ばれた？

世界が崩壊しているのは知っている。

それは今も目に映る赤々とした炎に包まれ崩壊した都市を見れば嫌でも理解できる。

それに、このスライム体の視界は360度全方向を見ている今現在も助けを求める人を見かけることも無ければ声も全く聞こえない。

その事実がこの世界の終わりを告げていると理解するためのさらなる判断材料と
なっている。

もし本当に滅んでいるとすれば、生き残りはこの場の3人だけとなるのだ。

ただ気になるのはこの場の3人以外に、魔素を含んだ肉体を持つ者の存在を感知していることだ。

シエル先生から送られてきた思念には、この場が今どういった状況なのかということ
が簡潔に説明されたものもあつた。

魔素の反応は即ち、人間を超越した歴史に名を残す英雄達の分霊のような存在、英霊だ。

その数は5。

その内の2つはこちらに向かつてきているのがわかる。

ひとまずこっちは後回しにしておいて、この状況どうしよう。

銀髪の美少女は何やらヒステリックに少年へ詰め寄り、薄ピンク髪の少女は興味津々とばかりにこちらを覗きこむ。

何よりこのリスと猫を合わせたような白い小動物は一体なんだ。

新手の魔物？

まあいいや。

まずこの混沌とした状況を何とかせねば。

あ、状況が混沌になっているのは俺のせいか。

よくよく考えてみたら召喚したらスライムでした、という話だからな。混乱するのもわかる気がする。

しかも喋るスライムとか何だよってなるか。

とりあえず仕切り直しとして改めて自己紹介だな。

「えーつと、改めて自己紹介いいかな？」

俺がそう提案すると現実逃避してたらしい少年から返事が返ってくる。

というか表情めっちゃ暗い。

なんだろう、このどうにでもなれ感。

いや、気を取り直そう。

ここはちよつと張り切っていいところを見せねば。

そう決心すると俺は人化して服を纏い、いつもの姿でこの場に降り立った。

我ながらスライムから人化するまでの過程をきれいにできたと思う。

「改めまして、俺はリムルⅡテンペスト。魔王だ。」

やや決め顔で俺は改めて自分の名を名乗る。

勿論円滑なコミュニケーションを図るための握手も忘れない。

様子を見てみると皆一様にぼかんとした表情で俺を見ていた。

どうかしたのかと思っていると少年が先に口を開く。

「あ、ああうん。藤丸立香、よろしく」

藤丸立香と名乗った少年は俺の出した手を握り返してよろしくと一言。

そこから色々こちらの事情に関してつついてきたがそれはあえなく邪魔された。

「フフフ、見つけましたよ。さあ、殺しあいましょう?」

藤丸たちのやや後方、積み重なった瓦礫の上を足場として立っていたのは鎌のような槍をもった女性。

だが、その肉体は人のものではなく、魔素で構成されたものであり、一目で英霊、サーヴァントだと確信できた。

どうやら藤丸たちの状況は緊急事態みたいだし、ここは大人な俺がひと肌脱ぐときだな。

改めてサーヴァントを観察する。

まず、エネルギー魔素量はさほど高くない。

俺やヴェルドラからしたら赤子のようなものだ。

まあ、比べる相手が相手なだけでこの世界からしたら高い方なのかもしれないし一概には言えないが。

レベル技量は戦わなければわからないが、それを含めても精々がAランクに届くかどうかといった感じか。

これならうちの国の兵士でも勝てそうなまである。
そうこうしている内にどんどん話が進んで彼女は俺に狙いを定めた。

「悪いけど、こういうのは手早く終えたいんだ。しかも相手をしてやれるほどの実力じゃないし。」

コイツにはこの世界でどのくらい俺の力が引き出せるか実験台になつてもらおう。

「舐めたことをいってくれますね、精々後悔して死になさい！」

すると俺の言葉に少なからず憤りを覚えたのか瓦礫を蹴つて突進を開始する。

藤丸たちにはこれがすさまじい速度に思えるだろうが、俺は違う。

知覚速度を切り刻んでコマ送りのように引き延ばした俺には遅すぎて欠伸をしてしまいうさだ。

だが、^{レベル}技量自体は目を見張るものがある。

体を動かすための最適解を導き出し、一瞬で最高速へと移り変わる様はさながら浜辺に打ち付ける波のように自然的に体が流れている。

なるほど、この世界のサーヴァントは^{エネルギー}魔素量こそ少ないと言えるかもしれないが^{レベル}技量なら俺たちの世界にも勝るとも劣らないらしい。

まあ、それもすぐに意味がなくなるのだが。

俺は^{アザトリス}虚空之神を使いほんの少しだけ『虚無崩壊』のエネルギーを取り出そうと試みる。

すると、どうやら成功したようで米粒ほどの小さなエネルギーでも超高密度である『虚無崩壊』のエネルギーを取り出した。

これでこの世界でもなんら不自由なく能力スキルを使えそうだ。

そしてその極小の『虚無崩壊』エネルギーを使って、はるか上空の、高度100000mくらいのところで半径20mほどの疑似太陽を作り出す。

そして熱を逃がさないようにある程度のところまでエネルギーの膜を張って疑似太陽を覆う。後はシエル先生にお願ひすれば何処へだって神之怒メキドを放てる。

よろしく頼むよ、シエル先生！

《仰せのままに、我が主》
マイマスター

「神之怒メキド」

そうして槍を持ったサーヴァントは俺に槍を届かす直前で飛来した。神之怒メキドによつて全身を貫かれ魔素の粒子となつて消滅した。

うむ、いくら実験のためとはいえこれは、

「やっぱちよつと大人げなかつたかな？」

あつけなく戦闘が終わつて出た感想がそれだった。

でもまあ、慢心して勝手が違う世界で油断してやられるよりはましだろう。

アイツを殴つたとして効果が全くなかつたら俺はいいけど後ろの藤丸たちが怪我を

負ってしまふ。

それは避けたい。

だから今のあつけない戦闘でもまあ問題はないはずだ。

「うーん、もうちよつと手加減すればよかったかも」

でもやっぱり今の敵さんが不憫すぎる。

まあ気にしないほうがいいな、うん。

そういえばみんな大丈夫かな。

一番心配なのがラミリスだ。

今の子供の姿ではとてもではないが自衛なんてできないだろう。

そもそも自炊して野宿できるかが一番不安なまである。

この世界に召喚されることは分かっているがどういった状況、場所で召喚されるかは

全くわからないのだ。

俺はこうして運よく英霊召喚に差し込まれた形で召喚されたが、他もそうとは限らない。
い。

適当な使い魔召喚の儀式に入り込んだりするのも有り得ない話ではないのだろう。

そんなことを考えていると藤丸が俺のクラスを聞いてきた。

クラスってあれか、逸話によって英霊の力を基本7つのクラスに当てはめるっていう

あれか。

俺は何だろう。

ヴェルドラソードを振り回したりしてるけどセイバーという訳でもなさそうだし、アーチャーになれるようなことをしてないしランサーなんてもつとない。

三騎士はないとして、四騎士はどうだろう。

バーサーカー、これはまず有りえない。

なんせ狂う要素がないからだ。

え、異世界に来てまで衣食住にこだわりすぎではないかって？

普通普通、あれくらい普通だって。それでバーサーカーは無いって。…ないよね？

次、ライダー。

無いね、まず乗り物に乗ってない。

あ、でもランガと一緒に召喚されていたらもしかしたら有りえるかも？

ということとは、

《どうやら主のクラスはキャスターに該当するようです》
マスター

キャスターしかないですよ、知ってた。

「ああ、一応キャスターらしいよ」

因みにここまで数瞬の思考である。

思考加速つてこういう時便利。

え？アサシン？

そんな恐ろしそうな子は知りません。

《これで近くに来ていた二つの反応の内一つの消滅を確認しましたが、もう一つ、その瓦礫で隠れている反応は如何いたしますか？》

あ、

完全に忘れてた。

だって仕方ないじゃん。

異常事態で思考が纏まってないときに明らかに敵対してそんな反応が5つもあつてその内の1つがもうすぐそばにいたんだから。

まあいい、なかったことにすればいい。

ポーカーフェイスは得意なんだ、この場を離れようと提案してる藤丸には悪いけどまだ問題を一つ解決しなきゃいけない。

そうときまればそれっぽいセリフ言わなきゃな。

「あ、それはそうとそこで隠れてるヤツ、出てこいよ」

俺がそういうとシエルが教えてくれた場所がゆらりと揺らめいて一人の男が姿を現す。

うん、我ながら油断できないすごいヤツとしての風格が出てた気がする。心なしか声が震えたような気がするが気のせいだ。

気のせいだったら気のせいだ。

男の姿恰好、それと表情にいたるまでさっきの女性とはまるで雰囲気違った。

正気は保っている様子で、いきなり「殺す」なんて言わないところをみると話がわかる相手のようだ。

《忘れてましたよね?》

忘れてないよ、そんなことあるわけないじゃないか。

ただ偶々別のことを考えてただけだよシエルさん。

《…そうですか》

…:…すみません。ホントはすっかり忘れてました。

「いつから気づいてたんだ？」

「勿論最初からだ、こっちの様子をうかがってるみたいで敵かどうか迷ってたけどまだ話分かりそうで助かるよ」

はい、全部シエル先生情報です。

シエル先生がいてくれなかったら俺はやっていけない自信がある。

どうやら俺と話がしたい様子だ。

えつとなになに、協力したいと。

ほほう、やはりコイツ正気を保っている様子だ。

俺の強さは分かったから後ろの藤丸たちはどうなんだ、という旨のことを聞いてきた。

まあ俺一人でもなんとかできそうだが万が一、というものがある。

それで藤丸がやられでもすれば本末転倒だしな、薄ピンクの子と藤丸のことを知るにはいい機会だ。

「わかった、そういうことなら俺からは文句ないよ。後は藤丸達が頑張ることだから」
そう男に言うと、男は「ありがとよ」と一言お礼を言つて藤丸の方を向いた。
俺はというとそのままバトンタッチする感じで藤丸の方へと戻つて後ろの瓦礫へと座る。

「んじゃ後よろしくー！」

後はそつちで頑張つてね藤丸くん。

俺は見てるから。

何かいろいろ言われてるけど無視だ。

これを何とかできなきやこれから厳しそうだし、丁度いい訓練だと思つて青ローブさん
にみっちり扱かれてきなさい。

青ローブさんと藤丸たちの戦闘が始まつてしばらく、俺はその様を眺めていた。

薄ピンクの子は身の丈ほどある大きな盾を巧みに扱いうまく攻撃を防いで藤丸の方
へ行かせないように立ち回っている。

対して青ローブは空中に何か文字を刻んだと思えば、それがたくさんの火球へと変化
し薄ピンクの子へ発射されていく。

それは、FPSのゲームでマシンガンを撃つかのようにながりの猛攻だ。薄ピンクの子はそれを防ぐのがやっとで攻めに転じられていない。

青ローブの魔素量はさっきのサーヴァントと比べるとやや大きく、藤丸が「ヘキヤスター」と言うにふさわしい戦い方を見せている。

その技量はやはり高く、魔導王朝サリオンの「魔法士団」に勝るとも劣らない。こいつはランクで直すとAはくだらないだろう。

ん？

異なる世界での戦闘を楽しく観戦していると俺の察知能力に引っかけたモノがあった。

その方へ向くと、優に何十もある様々な剣がこちらに飛来してくるのが見える。どうやら、一つの場所を動かずにいた所為で敵対者に狙撃されたようだ。

それがわかったのは放たれたと思われる場所に一つの魔素量を持つ反応があったためだ。

《どうやらうまく釣れたようです。虚空之神で攻撃を捕食しますか？》

その提案に俺はなるほど悟った。

ここを動かなかったことはどうやらシエルの策だったらしい。

相手の動向を早い段階で確認してこちらを攻撃するように誘導したってところか。

よし、やつておしまいなさい。

《では、ついでに攻撃してきた射手アーチャーも捕食してしましましょう》

え、そこまでやれるの!?

するとシエルが宣言した通り、飛来してきた反応に続いて狙撃してきたヤツの反応も消えて残す反応は目の前で戦っている青ローブを含め3となった。

とりあず、射手さんには南無さんと合掌。

攻撃したと思ったらいきなり即死攻撃喰らったんだからその驚愕は相当なものだろう。

FPSゲームとかだったら珍しくないことなんだろうけど現実起こったら発狂ものだと思う。

あ、青ローブは今の狙撃を感じたのかな？

この一瞬の間に薄ピンクの子が吹き飛ばされてるけど、追撃を加えずに辺りを警戒をするようなそぶりを見せる青ローブさんは丁度狙撃された場所の方へ顔を向けている。すごい勘だ。

スキルも無しにあんな野性的な勘を働かせて狙撃されたことに気づくなんて。

でもまあ、俺が虚空^{アザトリス}之神で捕食したんだけどね。

あ、青ローブさんは気のせいだと思って戦鬪を再開しようと思つて魔素を集め始めたな。

対して藤丸たちは覚悟を決めたようで、吹っ切れた様子のピンク髪の子を藤丸が背中を押すように二言三言囁いている。

恐らく、次の一撃でこの茶番は終幕を迎えるだろう。

無粋な横槍が入りかけたものの、俺はこの戦いの行く末を見守るべくしつかりと座りなおした。

ついに決着

「燃えちまいなあ!!」

放たれた炎は真つ直ぐこちらに接近しており、マシユが避ければ俺は黒焦げ。

「マシユー!」

「はい!!」

マシユが避けなかつたらそれはそれでマシユが危なくなるだろう。

そう頭でわかつていても、俺とマシユはあろうことかこの巨大な炎に突っ込んでいく。

近づくにつれてその熱がより鮮明に己の肌を焼きつくせるものだと思ふが、応にも理解させられる。

それでも、前へ出る足を止めるブレーキには成り得なかつた。

そうして、大質量の炎とマシユの大盾が衝突する。

けたたましい爆発音のようなものを辺りにまき散らしその熱が拡散する。

俺も後ろでその熱風に当てられ吹き飛んでしまう。

顔を上げた時にはもう決着は着いていた。

「はあ、はあ、はあ」

苦しそうな表情で盾を構えて立つマシユは今にも倒れてしまいそうな勢いで荒々しい呼吸を繰り返す。

「おいおい、勝ったつてのになんだその顔は。勝者がするような顔じゃねえぞ？」

対して目の前に迫った盾をもともせず涼しい顔で地面にへたり込むキャスター。からからと笑いながらマシユに軽口をたたくその姿は全く敗者としての空気をこれっぽちも見せなかった。

「で、ですが、ほんとうに、ぜんりよくで、いきが、」

構図で言えば、マシユが盾でキャスターに攻撃する直前で寸止め(?)をしている状態で、キャスターはそれに気圧されたのか地面にへたり込んでいる状態だ。

「ま、及第点つてところだな。今の攻撃に怯みもせずそのまま突っ込んでくるたあ予想外だったぜ。案外肝が据わってんだな、嬢ちゃん」

「それは、ありがとう、ごさいます、」

まだマシユは息が絶え絶えで今にも倒れてしまいそうだが、その表情はとても清々し

いものだった。

「決着がついたようだな。特に怪我もしてないみたいだし、これで文句はないだろう？」

いつの間にか座っていたはずのリムルが俺の隣に来てキャスターに向かって問う。
心なしかその表情はドヤ顔になっている気が…。

気のせいかな？

「そうだな、俺からもう文句はねえ。ケルトの戦士は勝者に従うもんだ」

「そっか、わかったよクー・フリーリン」

ん？

「あ？名乗った覚えは無いはずだが、何故俺がクー・フリーリンだと分かった？」

リムルがキャスターの真名らしきものを口にしたとたん、辺りを鋭い空気が覆った。

「え、ちよ、今度は何なの!？」

所長もコロコロと変わる雰囲気に着いていけないのか声を上げる。

というか、いたんだ所長。ほぼ空気だったから忘れかけてた…。

「ん？ああ、ちよつと座にアクセスできるようになったから見た目とか戦法とか武器

とか解析できれば簡単に真名がわかるようになっただけさ」

ん？

「「……はあ?」」

いや。え?。

やばい、今リムルが言ったことを理解するのを頭が拒否した。
所長なんか驚き過ぎて残念な美人みたいになつてる。

キヤスターは杖落としてる。

あのマシユですらぼかーんとしてる。

「あー、やつぱりそうなりますよねー」

何かを諦めた風な声を出すリムルだが、ああもう、思考がストップして思うように考
えられない!

召喚された英霊を見ただけで判別可能で真名がわかるってなに!?

「いや〜さつき攻撃してきたやつを捕食して情報を解析してたら、なんか召喚された
時の残滓っぽいものを迎れてそこから座にアクセス出来ちゃつてさ。あはははは」

「いや、説明が意味わかんねーって。どうやったら召喚された残滓なんて迎れんだよ！普通そんな残滓なんてもん消滅してゐるわ！」

キヤスターはリムルの説明に納得がいかないのか猛烈な反応を示す。

俺はもうリムルについては諦めた方がいいかもしれないと、このときすでに悟った。

「…なにこの化け物、これもうリムルだけでこの特異点を修復できそうだわ」

所長、それ言っちゃいけない約束かと思えます。

「ハア、ま、一応自己紹介といこうか。そこのヤツが言った通り、俺はクー・フリーン、今回はキヤスターでの現界だ。まあ少しの間だがよろしくな」

「あ…」

とキヤスターが自己紹介したタイミングであることを思い出して声を上げた俺に注目が集まる。

まあ集まって当然のタイミングだから仕方ないけど。

「どうかしたの？藤丸」

「あー、えーとですね、そういえばリムルに全員の自己紹介済ませてないなーと思いまして」

と所長の疑問に答えると所長もそういえば、と今にも口にだしそうな顔をする。

今まで戦闘の連続だったから俺もうつかりしていて、今丁度気の抜けたタイミングで思い出したわけだ。

「確かに、藤丸の言うとおり私たちの自己紹介をしていなかったわ。失念してごめんなさい」

「いや、気にしないよ。クー・フリーンも同行するんだし、ここいらで全員分の自己紹介を聞かせてもらおうかな」

「そうね、ありがとう。私は人理継続保障機関“カルデア”の現所長であるオルガマリ・アニムスファイアです。以後よろしくお願いします」

「わ、わたしはマシユ・キリエライトです。先輩のサーヴァントをしています」

「フオウ！」

「ロマンは…：いつのまにか通信切れちゃったね」

そんなこんなで全員分の（通信が切れたロマンを除く）自己紹介を終えた。

リムルはリムルで一人一人によりしくと言って気前の良い笑顔を見せている。魔王って言ってたけど、こうやって皆へ挨拶してるところから人としてとても好感が持てる。

「んじや、狙撃に気を付けながら移動すんぞ。今まで仕掛けてこなかったことが奇跡みてえなもんだしな」

そう言つてクー・フリーンはここを離れるように促す。

「そうだね、狙撃手は討ち取ったけどまだまだ安心できるような状況でもなさそうだし」

「tbc」

リムルの何気ない発言にまたもやクー・フリーンは凍りついた。

俺はもうリムルだからと諦めがついているけどクー・フリーンはそうじゃなかった。でもいつの間にかそんなことしてたんだろう。

攻撃された、なんてみじんも感じなかったし…。

「おいおい、それマジで言つてんの？じゃあ俺が嬢ちゃんとかと戦つてる時に感じたアレは気のせいじゃなかったってことか!？」

もの凄く驚きようにリムルはビックリしたような顔をするけどすぐに気を取り直すように咳払いを一つつくと言明に入った。

「そうだね、あの追撃を加えなかった時に丁度狙撃された。けど全てこつちで処理しておいたから安心していいよ」

「相当規格外だな、アンタ。ひよつとすると冠位適正でも持つてんじゃねえの？」

「さあ？俺は別世界からの訪問者だから、そういうた事情は管轄外だ。こつちとしてもそれなりに目的を持って動いてるし、冠位がどうのなんて知ったことじゃないね」

リムルにも目的があるのか、まあそうじやなきやここまで協力的にはならないか。

でも、正直そんな規格外ともいえる力を持ったリムルが味方で本当に良かった。

敵側にいたら一分も生きていられる自信がないや。

「そうかい、まあそれだけはつきりとした目的があればこつちとしても信用がしやすいつてもんだ。そうだろ坊主？」

「え!? あ、うん確かにね」

話を振られるとは露ほども思ってたからついビックリして大きな声だしちゃった。

でもまあ、考えてみればリムルにも目的があるのは当然か。

いくら知識を得たからと言っても何の目的も無くて善意だけでここまで親身になって協力してくるのも何か怖い気もする。

別に目的があつて、そのついで感覚で助けられている感じがするし、その方が確かにこつちも信用しやすい。

「そんじや、目的地変更だな。聖杯のある柳洞寺を目指すぞ」

「てことはやつぱりこの冬木の街では、聖杯戦争が行われていたのね」

「聖杯戦争？」

なにそれおいしいの？

じゃなくて、その説明は若干受けた。

セイバー、アーチャー、ランサー、の三騎士と、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの四騎士といったその英霊の伝承からもじつてそれに特化したクラスというものが召喚されるときに割り振られ、合計七騎のサーヴァント同士を戦わせて最後の一人になるまで戦う魔術師の大儀式（？）ってカルデアの職員の人にシミュレート中に説明された。

無茶振りだよね、やっぱり。

何も知らない一般人である俺にあれこれいきなり吹き込んでも理解できるわけがないのに。

ただわかったのは勝者にはなんでも願いが叶う器か何かが手に入るらしい。

なにその難易度が高くなったドラゴンボール。

あれは七つの球を集めて合言葉言えば願い叶うけど、聖杯戦争は七人いる参加者の内勝ち抜いた一人だけしか叶わないってところがつらい。

「あなた、シミュレートを受ける時に説明されたことも忘れたのかしら？」

怒っているとも呆れているともとれる声を出した所長は俺を睨む。

それこそギロツとか擬音が出そうなくらいに。

「い、いやあ覚えていますよ？ただしつかりとした説明をされてなかっただけで……」

「先輩、聖杯戦争とは魔術師が『』に辿りつくために御三家と呼ばれる人たちが作り出した大儀式のことを指します。簡単に言うとう聖杯戦争の名の通り7人の聖杯に選ばれた魔術師たちが聖杯を賭けて一人になるまで争うというものです」

「あー、まあ簡単に言えばそうなるか。参加資格は令呪で、争う道具、兵器はサーヴァントってことになる」

マシユの説明にクー・フリーンの捕捉が入る。

なるほど、とても簡略化されてる説明でとてもわかりやすい。

「それで、その聖杯戦争が変質してしまったことで起こった異変がこの特異点Fってことになるの?」

「ああそうだ。最初は普通に聖杯戦争やってたんだが、しばらくすると突然人が消えだして気づいたらこの様だ。セイバーがおかしくなってるからこうなったってことは分かったから今まで殺りあってきた奴らがセイバーに挑んでいったんだが…」

「敗北していった、ということね」

所長がクー・フリーンの言わんとすることを推測して言葉にする。

それは射を射ていたようで「そうだ」と答えた。

「セイバーの奴は既に聖杯を獲得している様子でな、ほとんど無尽蔵の魔力を持つてる。それで挑んでいった奴らは敗北していった訳だ。さらにどんなカラクリかは分か

んねえが聖杯の泥に塗れてからは先のランサーみたいに狂暴化していった」

「それが此処の現状か」

そういう訳だ。とクー・フリーンは答える。

聖杯というののはとてもすごいものらしく英霊の力を存分以上に引き出しているようで、そのセイバーを倒すのはとても困難らしくクー・フリーンは倒せる好機を覗うため潜伏していたらしい。

そこで現れたのが、俺たちであり、リムルだった。

それから様子見に向かって今に至ると。

「なるほど。…それで、セイバーはどんな人なの？結構詳しくそうだけど」

俺の発言に他の皆はうんうんと頷く。

「あー、詳しいとか何というか、奴の宝具を見れば誰だっつてその真名に辿りつく。」
「もったいぶらずにさっさと言いなさいよ、真名がわかっているなら対策の一つでも立てればいいでしょ？」

所長が煩わしいといった様子でクー・フリーンに詰め寄る。

それにクー・フリーンは参ったような様子を見せて口を開く。

「わかってらあ。さっさと言うからんな急かすなつて、奴の宝具は『エクスカリバー』。お察しの通りセイバーの正体はかのアーサー王つてわけだ」

この一言に俺も、マシユも、所長も、リムルですら理解した。セイバーの正体はアーサー王。

この事実にはクー・フリーンが今まで潜伏して好機を窺うしかなかったことの意味をようやく理解した。

藤丸立香は知る所ではないが、英霊とは呼ばれた土地でどれほど有名かどうかという知名度でもステータスに影響し、アーサー王ともなれば世界的に有名な英雄であり、それこそ知らない人間の方が珍しいというほどの知名度を持つ。

この事実にはマシユとオルガマリーは軽い絶望を味わうことになった。だが、お忘れではなからうか。

この中でただ一人、別世界出身で知名度もクソも無い状況であるはずが、一番強いとされた人物、否、スライムがいることを。

「アーサー王とかエクスカリバーとかめちやくちやかっこいいじゃないか、ロマンだよロマン」

一人ボソツと呟く件のスライム。

リムルだけは、皆とは見当違いの感想を持った。

アーサー王？

クー・フリーン？

エクスカリバー？

それがどうした。

今ここに存在する別世界の大魔王の敵に成り得る英霊など数える程もない。

それこそ、かの英雄王ギルガメツシュが相手でもその余裕ともいえる姿勢を崩すことは叶わないだろう。

全てはリムルの神智核^{マナス}である《シエル》の策謀の上なのだから

それをリムル含め全員が知ることになるのは、もう少し先の話である。

いざ聖杯へ

今現在、俺たちはクー・フリーンの案内で柳洞寺を目指して歩いてきた。

その道中に骸骨なんか敵対行動を取ってきたけどリムルやマシユ、クー・フリーンが目につくたびに一瞬にして屠っているから問題なかった。

そんな訳で俺たち一行は時偶に戦闘とも呼べぬ蹂躪をしながら歩いているとクー・フリーンから声がかけられる。

「こつから先、残ってるのはセイバーの奴と動こうとしないバーサーカーになるが、バーサーカーに関しては放置でいい。無理に争うとすればセイバーと戦いになる前にお陀仏になる」

「その、バーサーカーってどんな英霊なの？」

「そうだな、これは坊主にもわかるくらい有名な英霊だ。真名は“ヘラクレス”。1
2の試練を超えたギリシャの二大英雄だな」

あ、よかった。知ってる。

というか強そう。

俺が知ってるってことは所長やマシユも当然知っていると思うし、俺よりもその危機

感は大きく感じると思う。

所長は驚きすぎて固まってるし、余程すごい英霊なんだろう。

「力も強ええ、巖のようできて速い、更に宝具は“命のストック”と来たもんだから聊か手に余り過ぎるくらいに強力な相手だ。事を構えるだけの余裕は無えってこった」

うわあ、酷い。

それってRPGのゲームで言う格上の相手にストックがあつて何回も倒さなきゃいけないってことだよな。

なんて言うかすごいマゾゲーになりそうだ……。

「で、でもリムルがいれば大丈夫よね？」

所長が恐る恐るといった感じでクー・フリーリンに問う。

その表情は若干引きつっており、その“ヘラクレス”という英霊がどれだけの相手かを暗に語っている。

やっぱり、余程の相手なんだろうか。

「あー、多分いけると思うが、なにより無駄な戦闘には変わりねえ。バーサーカーは既にセイバーによって敗北している。俺が生き残って、セイバーが倒されればそれで聖杯戦争は終結するはずだ」

「そ、そうよね。ごめんなさい、少し取り乱したわ」

あー、確かにそうか。

俺たちはとにかくそのセイバーに勝てればいいから、その明らかにヤバイバーサーカーは別に無視しても問題は無いのか。

今更気づいた。

「そら、見えてきたぞ。あの洞窟がそうだ」

見ると、目的地に到達していたみたで、目の前には俺たちカルデアの一行が入っても何ら問題が無いくらいの洞窟があった。

魔術素人の俺でもよくわかるくらいに『やばい』と思わせるような濃厚な気配を感じる。

「へえ、これはすごいな」

『ああ、やっと回復した。みんな、その奥に聖杯と思われる超級の魔力炉の反応がある。気を付けてくれ・・・ってすぐ近くにサーヴァント反応!?この反応は、キャスター?』

「あ、ロマン。良かった、通信が回復したんだ。キャスター、クー・フリーンは一時的に力を貸してくれてる協力者だよ」

『え、そうなの!?!』

洞窟に足を踏み入れようとしていたその時、ロマンの通信が回復したようでカルデア

からの通信が入った。

しかも、どうやらこっちのモニターが不安定らしくて俺たちの状況は通信でしか確認ができないんだとか。

うーん、どうにか改善させたい……。

『……そういうことか。なら安心だね。あ、僕はロマニ・アーキマン。ロマンと呼んでくれ』

「ああ、クーフリーン、キャスターだ。……なんか、お前あれだな。何となく信用できねえやつだな。大丈夫なのか？こいつ」

『酷いなあ！僕はきちんと医療トツプとして果たすべき責任は果たしてるつもりなんだけど!』

「はははっ」

そうして、ひと悶着ありながらも、俺たちは洞窟へと突入していった。

カラカラカラッ。

洞窟を進んでいって、中盤の方に差し掛かったあたりで、骨と骨がぶつかりあう乾いた音が響く。

見ると、奥の方から今まで戦ってきたスケルトンとは違う、トカゲの頭骨を持った人

型の骨がそれと同じような材質で出来た武器を持つて襲いかかってくる。

「な、なにあれ!？」

「竜牙兵か。丁度いい、坊主、嬢ちゃんと一緒に切り抜けてみな。練習とまではいかな
いだろうが、まだ慣れてないだろ」

「え、まあそうだけど」

「いつまでもおんぶにだっこじゃあいらねえだろ？俺とやりあつた時のようにいっ
ちよかましてやれや！」

い、いきなりそんな無茶振りをされましても!？」

つて、そうだ。リムルは!？」

「お、いいなそれ。見張つとくから、二人でやつちやつて」

救いはなかった!!？」

「先輩、指示を!？」

「ぐ、わかつた。マシユ」

マシユが戦うのに、俺が怖気づいちやいけないよね。

俺にだつて、見栄を張りたい時だつてあるんだから。

竜牙兵は合計4体。

もつというかもしれないけど、今の所これだけだ。

その内一体が対になっている短剣を振りかぶって攻撃してくる。

「マシユ！」

「はい！」

その攻撃を、マシユが俺の指示を聞いて持つている大きな盾で弾く。

それによつて、こいつに大きな隙が出来ている。

「吹き飛ばすんだ！」

「わかりました！、ハア！」

指示通り、隙を晒している竜牙兵の胴体を盾で押し出すようにして吹き飛ばす。

その正面に居たもう一体の竜牙兵が吹き飛ばされた奴と正面からかち合つて両方もその衝撃に耐えきれずに、乾いた音を立ててバラバラになる。

「よし！」

即興で考えたことだけど、うまくハマってくれてよかった。

残り2体だ。

一体は大きな剣のようなものを持っていて、もう一体は先ほどと同じく二対の短剣を持つている。

マシユの攻撃を警戒しているのか、2体の竜牙兵はその場で膠着している。

左右に分かれているので、片方を攻撃すれば片方に攻撃されるリスクがある。

けど、

「よし、そのまま攻めて！」

「了解しました！」

けど、マシユならきつとその前に倒してくるはずだ。

「やあ!!」

そのまま突進するように盾を突き出して左にいる大剣を持った竜牙兵に攻撃する。

一瞬、大剣で持ちこたえようと踏ん張るも、盾の重量に負け竜牙兵の体が浮き洞窟の壁に激突してその体をバラす。

もう片方はそれを確認するや否や、すばやくマシユに向かって短剣を振るう。

無防備な背中へと目掛けて凶刃が突き出される。

「はあああ!!」

でも、ここで一太刀食らうようなら、俺とマシユはクー・フリーンに勝つことなんてできやしない。

体を捻り、盾を横にして後ろの短剣を持った竜牙兵へと向けて大きく振りかぶるようにして薙ぐ。

「——ッ!!」

丁度体の側面を盾で殴打され、あっけなく最後の竜牙兵は砕ける。

「戦闘、終了です。マスター」
頼もしい。

そう思うには、十分なほどに見事な戦闘だった。

まるで主を守る騎士のように悠々とした様は限りなく俺に安心感を与えてくれる。

それと同時に、俺とさほど変わらない歳であろう女の子に戦わせてしまっていることに、一種の罪悪感に近いものを感じる。

仕方がないことはわかっている。

俺はマスターで、マシユはサーヴァントなんだとわかっている。

でもやっぱり心のどこかでは少なからず悪いと感じてしまう。

だからこそ、俺はしっかりとマシユを支えないといけないんだ。

この、どこか儚さを感じさせる女の子を。

「へえ、やりやあできんじやねえか。坊主もいい着眼点を持つてる」

「そ、そうかな」

だから、俺はしっかりとマスターであることを自覚して、俺自身も強くならなくちゃいけないんだ。

「自信は持つて損はないよ、藤丸くん。気負いすぎないようにね」

「うん、そこは安心して。俺は一般人だからできることとできないことの分別はしつ

かりするから」

「うん、君はそれでいい。さ、もう少した。肩の力を抜いて行こう」

「はいー！」

リムルが言ったその言葉に、俺は大きく返事を返した。



リムルは、不思議な人だ。

この人が大丈夫と言えば、本当に大丈夫な気がしてすごく安心できる。

それくらい力があるんだろう。

だから、これも大丈夫だ。

「ほう、面白いサーヴァントがいるな」

黒い鎧を纏うセイバーが、洞窟の最奥にて大聖杯を背に立っていた。

これが、この特異点F最後の戦いだと痛い程伝わってくる。

俺は、俺たちは、あの黒いセイバーを倒してこの特異点を修復する。

それが、俺の、カルデアのマスターとしての使命だと信じて。

黒き騎士王

「・・・ほう、面白いサーヴァントがいるな」

俺は、その黒を基調とした騎士風の女性の影に、魔王を見た。

そう、その威圧感、その眼差し、そのカリスマに魔王を幻視した。

「あ・・・」

遅い来る恐怖に、俺は声を出すことさへ忘れてただ気持ちすら負けたかのように、後ろに数歩後ずさっていた。

彼女を纏うのは、それこそ無限ともいえるような可視化される程の濃密な魔力。

圧縮され過ぎたそれは最早既存のものとは程遠いような黒に染まっている。

それを象徴するかのように騎士王の剣も黒く染まっついて、それを中心として濃密な黒い魔力も蜷局を巻くように纏っている。

怖い

怖い。

今までの気丈な振る舞いが嘘の様に薄れて、代わりに恐怖が俺の心を満たしていく。
「あれが、聖杯？超抜級の魔力炉心じゃない……!?!」

所長はあのセイバーよりも、聖杯の方に意識が向かっているが、俺がセイバーに抱く恐怖とはまた違った恐怖を抱いているようで、その綺麗な顔を歪めている。

「坊主、気持ちは分かるが、今は我慢してろ。なんせ一番怖いのは、盾の嬢ちゃんの方なんだからな」

背中をぼんつと軽く叩いて声を掛けてくれたのはクー・フリーンだった。

その言葉に俺はハッと気づかされた。

そうだ、俺なんかより、戦わない俺なんかよりも、マシユはあのセイバーと直接戦わなきゃいけない。

それなのに、俺はこうして見ていることしかできないのか？

——違う！

「マシユ、頑張つて」

それは違う。

俺はカルデアの、マシユのマスターだ。

たった一人、彼女に寄り添える存在だ。

俺はマスターで、マシユはサーヴァント。

でもだからって、俺は何もできない訳じゃない。

ただの一般人な俺でも、できることがあるんだから。

こんな無力な俺にもできることは、こうしてマシユを元氣付けること、勇氣づけること、励ますこと、鼓舞すること。

マシユのことを支えてあげることだ。

魔術の方もへっぽこで、マスターとしての指揮もよく理解していない俺ができることといったら、こうして励ますことくらいしかない。

そんなことを考えれば、俺は自然とマシユに声をかけていた。

「——はい！」

だから、俺もマシユの勝利を信じてこの戦いを見守るんだ。

「リムルも気を付けて」

「ああ、心配してくれてありがとうな」

リムルはこの状況に何ら変わらないいつもの余裕を保ちながら俺の言葉に応える。

にかつとした人あたりのいい笑みも忘れずに、だ。

やっぱり、この人はすごい。

俺達が困難だと思ったものでも、この人はそれを小さな問題とすら見ないのではない

だろうか。

「話は済んだか？ならば、その盾の守りが本物か確かめてやろう」

俺がリムルに声掛けをした直ぐ後だった。

セイバーが声を発したと思えば、最奥にいたセイバーが俺の視界から消えた。

「・・・え？」

「先輩!!」

すると、直ぐ近くで金属同士がぶつかるけたたましい音が鳴る。

「くう・・・!!」

見ると、俺のすぐ近くでセイバーの剣をマシユがその大きな盾で競り合っていた。

「マシユ!?!」

「安心してください、先輩・・・。私が、守ります・・・から」

ギリギリと聞こえてくる力と力の押し付け合い。

セイバーからの圧倒的膂力に耐える盾の少女は体全体で踏ん張りを利かせ何とか体

制を拮抗させている。

そこで守られている俺ができることは？

声を掛ける？

一緒に踏ん張る？

「ボサツとしてんじゃねえ！」

そんなクー・フリーンの声が聞こえたのは、俺の頭上。

いつの間にか空中へ跳んでいたクー・フリーンは、すぐさま火球を作り出してセイバーを狙って弾幕を張る。

「無駄なこととを」

それを、まず競り合っていたマシユの盾に蹴りを入れ、発生する力で距離を取ると、黒く染まった聖剣を素早く薙ぐ。

それはただ難いだけでなくにもかかわらず、凄まじい魔力を帯びた斬撃となつてこちらを飲み込まんと向かう。

凄まじい魔力のブーストがかかったソレは容易く火球の弾幕を飲み込むと、そのまま空中にいるクー・フリーン諸共俺達を狙う。

このままでは間違いなく俺達はこの黒い暴力に蹂躪され、文字通り消し炭になるだろう。

「アザトリス虚空之神！」

だがそれはリムルによつて阻止される。

「リムル……！」

「ははは、笑えねえなこりやあ」

俺がポロリと零した眩きを聞いてリムルはにかつと景気よく笑う。

それ以前にリムルのした行為にクー・フリーンは感嘆した様子で笑みを浮かべていた。

それは、無傷の俺達は勿論、つい先ほどまで破壊の本流があつたのだと感じられず、俺の方には余波である風すらも届いてない。

つまりは、俺の目の前でその斬撃はリムルのただ一言によつて消失して……

「馬鹿な……、仮にも聖剣の一撃がこうもあつかりと無力化されるだど……？」
その事実にはセイバーが動揺と共に警戒を増すのがわかる。

それを証明するように、この距離でもセイバーはしっかりと腰を落とすいつでもトツプスピードで動けるように構える。

「どうやら、想定外のサーヴァントも混ざっているらしいな。相当規格外な輩と見た、貴様は危険だ」

そう言うときセイバーはまた消える。

「なっ、速すぎる!?!」

だが、今度はさっきの比ではなかったのか、クー・フリーンですら驚愕の表情だ。

そして一瞬でセイバーはこちらに移動したかと思えば、既にマシユの守りを掻い潜り

剣の間合に俺を捉えていた。

状況的に、俺のすぐ左隣にセイバーの姿をкаろうじて認識できた程の一瞬の出来事だった。

「・・・え？」

瞬間、俺を襲つたのは極めて原始的な『死』への恐怖だった。

「——死ぬ、主従諸共！」

そして、今剣が振り下ろさせる。

このまま俺が死ねば、俺は勿論、契約しているリムルだって魔力の供給が無くなり、サーヴァントとしての活動が出来なくなるかもしれない。

リムルはもともこの世界の住人ではないから、俺とのパスが切れればどうなるか想像もつかない。

だから、セイバーが何よりも先に俺へ攻撃を仕掛けて来たことは合理的に見て適当な手段であるといえた。

「——なるほど、魔素——、こつちでは魔力だっけ。それを使って進行方向とは逆に噴射してジェットエンジンのように推進力を得ての高速移動か。悪くない」

だが、セイバーの剣は振り下ろす前に片手で柄を抑えたリムルよってピタリと動き

を止められていた。

「でも、それじゃあまだ遅い」

そう呟くリムルはセイバーの膂力を片手で受け止めているにも関わらず涼しげな表情で、かなりの余裕を感じられる。

リムルは二ツと笑うと剣を抑えている手に力を込め、突き出すようにして弾く。当然そうなればセイバーの腕は剣と共に跳ね上がり、無防備となった胴を晒す。

「ハッ！」

そしてリムルは、そのままセイバーの胴体へと掌底を叩き込んだ。

「グハッツ!!!」

するとセイバーはそのまま壁の方にまるでボールの様に凄まじい速度で水平に吹っ飛んでいく。

そしてそのまま壁に衝突し砂埃を巻き上げる。

これで多少のダメージを負わせれたはずだ。

「へえ、意外と簡単にできたな」

そう呟くリムルは出した手を見つめながら歓心していた。なにがそんなに嬉しかったのかはわからないけれど、今のうちに距離をとるか？

いや、それならー。

と、俺はここで初めて冷静に思考を回していた。

いきなりの『死』の危険に晒されて、かえって恐ろしいほどにその思考は冷徹に回っていた。

「ごめん、ちよつと油断してた。今からでも気を付けるよ」

「やつとか坊主、まったくヒヤヒヤさせてくれやがって。テメエはその嬢ちゃんと後方で指示を出すことを優先しろ！今回はリムルに助けられたが、次もそうなるとは限らねえ」

俺はクー・フリーンの言葉にわかったと返すと言われたとおりに所長を連れて全体を俯瞰しやすい位置までさがる。

丁度そのタイミングで、吹き飛ばされたセイバーからの濃密な魔力を感じた。

「凄まじいな。私の魔力放出をああも簡単にやつてのけるとは、敵ながら見事といえる」

「賞賛は素直に受け取るよ。再現するのは得意なんでね」

吹き飛ばされた方であるセイバーに目立った外傷はなかった。

ある程度ダメージを与えられたと思つたら、案外そうでもないらしい。

けれど、確実にわかるのは俺達に対する警戒レベルを数段引き上げたのだろうという

ことだった。

「そうか。ならば、もう手加減など考えん。再現などさせる暇もなく完膚なきまでに踏み潰す！」

セイバーの纏う魔力が更に数段その密度を上げた気がした。

「これ……、まさか!？」

「所長？」

それを感じて、所長の表情が強張る。

まるで、これ以上の生存が難しいというような、明確な『死』を見た瞬間のようだ。

「宝具が来る！」

宝具？

確か、サーヴァントの持つ必殺技のようなものだったはず。

一つ一つとっても強力で、それを使われること自体が負けフラグなチート。

厳密には違うらしいけど、俺はこういう認識をした方がわかりやすいからそうして
る。

それが使われるってことは……。

使われるってことは、つまりは絶賛ピンチな状況？

『そんな、魔力数値がどんどん上昇してる!？まるで底が見えない、この洞窟どころか、

都市一体を吹き飛ばす気なのか!!?」

「ちよつと、ロマニ！それ本当なの？それじゃあどうしたって終わりじゃない……」
終わり……。

所長の言うように、このまま何もできなければ本当に終わってしまうのか？

「させつかよ！嬢ちゃん、全力で攻撃しろ、俺が援護する！セイバーの奴に宝具を撃たせるな!!」

「で、ですが……」

嫌だ、それは嫌だ！

まだ、俺は生きたいし、もっとたくさんの経験をしたい。

それに――。

「どうする？藤丸くん。このままなら、確実に皆お陀仏だぞ」

いつの間にか、リムルは俺の真ん前に立っていた。

いつもの様な気のいい笑みは無く、ただ真剣に俺の真意を問いただしていた。

俺は一体、どうなりたいのかと。

俺はもつとリムルと仲良くなりたい。

「俺は、」

皆と一緒に、カルデアに帰りたい。

所長と、マシユと、リムルト、俺で、皆で。

「俺は、マシユを信じたい。だから、リムルは宝具を防いだ後の切り札であつて欲しい」

「・・・よし、合格だ。今ここで俺に頼らなくて良かったな」

「うん。ここでリムルに頼つてたら、俺も、マシユも成長なんてできないから」

「そうだな、うまくやれよ」

そう言つて、リムルは俺の背中をぼんと押した。

それは俺が踏み込めなかった最後の領域を超えさせてくれた気がして、恐怖とか、緊張とか、焦燥とか、そういうごちゃごちゃとしたものが一斉に晴れて、静かな落ち着きと、何でもできるかのような全能感が俺の体に漲ってくるのがわかる。

・・・全く、この人には敵う気がしない。

「マシユ!!!」

俺はここで、マシユのマスターとして本当の一步を踏み出した。

「は、はいー!」

このままセイバーに宝具を使わせれば、確実にここら一带は吹き飛ばらしい。なら、どうすればいいか。

単純な話、使わせないか、防ぐか。このどちらかだろう。

ただし、今もクー・フリーンが魔術で攻撃しているけどセイバーの持つ圧倒的魔力量で全部吹き飛ばされている。

生半可な攻撃ではあの魔力のシールドは抜くことができないだろうと直ぐにわかる。なら、防ぐしかない。

どうやって？

「マシユ、宝具を使うんだ」

簡単だ、こつちも宝具を使えばいい。

「で、ですが私は宝具が……」

「それでも、やるしかない。大丈夫、マシユならできる。なんつたつて、俺のサーヴァントなんだろう？」

「先輩……」

宝具が使えない？関係ない。

俺の最高のサーヴァントは、この一番カツコイイタイミングを逃す訳がない。

「……わかりました。やってみます！」

それに、マシユにはその大きな盾がある。

皆を守るには、余りにか弱い存在だけれど、この冬木に来てから俺や所長を守るため

に勇気を振り絞って戦ったその心は何よりも気高く、美しく、何よりも頼れるものだから。

「私は・・・、」

「卑王鉄槌、極光は反転する。光を呑め!!!」

「皆を守る!!」

何よりも美しい心を持つ少女は、今も後ろの存在を守るため勇気を出して前に立つ。

『約束エクスカリバー・モルガンされた勝利の剣!!!』

有り得ないほどに高まった魔力は黒く、昏く変色し、俺達を全て飲み込まんとして極光となつて一直線に蹂躪を始めた。

決着

「あ、あああああああ!!!」

言葉にすれば、まさにそれは黒い本流であった。

その圧倒的な魔力は骨すらも残すまいという気迫を直感する。

それを、吹いたら折れてしまいそうな華奢な身を以てマシユは受け止めていた。

「ぐ、ううう、…ダメ、このままじゃ…」

「マシユ…!!」

「逃げて…ください、先輩…。やはり私では…宝具が…」

それは宝具ではない、盾の防御力に任せた時間稼ぎだった。

このままではあと一分もしないうちに決壊し、マシユ共々比喩でもなく蒸発するだろう。

「何か…何かないのか?」

あのセイバーの宝具をどうにかする方法が。

マシユを、助ける方法が。

「藤丸!」

「所長……？」

「令呪を使いなさい!!」

令呪……？

「令呪はサーヴァントに対する三回の絶対命令権、マッシュに宝具を使わせることができるかもしれないわ!」

令呪は、命令権…。

「く、先輩……早く、逃げて……」

令呪で命令して、マッシュに宝具を使わせる。

そうすれば、確かに助かる可能性は、ある。

けれど、それは命令だから無理矢理そうさせているんじゃないのだろうか？

多分、令呪っていうのは色々な過程をすつとばして結果に繋げるんだと思う。

サーヴァント側の意思すらも曲げて、そうさせる命令権。それが令呪。

「駄目だ……」

「はあ!?!」

どうしてかは、俺も良くは解らない。

けど、それは駄目なんだと強く感じた。

「それじゃあ駄目なんです。それじゃあ、マッシュのためにも、俺のためにもならない」

「ちよ、アンタ自分が何を言っているのかわかってるの!？」
「わかってます!!でも——」

ふわつとして何となくとしかわからなけれど、これは令呪を使って俺が命令することじゃない。

「——マシユ自身がやらないといけないことなんです」

マシユがやらないといけないんだ。

「今しかないんです。今がチャンスなんです!」

「でもそれじゃあ!!」

「先……輩……」

黒い奔流を真つ直ぐ見つめる。

俺はマスターだ。俺の大事なサ^後ヴァ^輩アントが必死な思いであれを受け止めているの

に、後ろでただ見ていることなんて、できない!

「大丈夫、マシユなら絶対できる」

気づけば、俺は盾を支えているマシユに近づいて、その細い手を握っていた。

「ダメ……そこに居ては、危険です……」

「構うもんか。どうせダメでも、特異点に来る前みたいにこうしてマシユの手を握っ

ていたい」

「先輩……あつ!？」

その時、黒い奔流の勢いが増したような気がした。

本格的に時間が迫ってきてきているけれど、何故か俺の心は変に落ち着いていた。

「大丈夫だ。なんとたつて、マシユは俺のサーヴァントなんだから」

そんな、漠然とした確信は俺の中でしつかりと確立していく。

マシユとは、今日出会ったばかりでまだお互いのことも良く分かっていないけれど、それでも。

マシユはとても優しい女の子だということ、わかっている。

ここへ来る前の、事故が起きた時。瓦礫にその小さな体が押しつぶされて苦しいはずなのに、マシユは一言も『助けて』とは言わなかった。

そればかりか、マシユは会ったばかりの俺を心配して、気に掛けてくれた。

その時にはもう、自分は死ぬんだと分かっていたはずなのに、それでも先に言葉になつたのは、俺への心配だったんだ。

そんな他人を思いやれる優しい彼女が、今日の前であの黒い奔流を受け止めている。

それなのに、何もできない自分が情けない。

けど、それは仕方が無い事なんだってことは、わかる。

ただの一般人の俺が前に出て行っても、『痛い』とも思わずに蒸発するのがオチなん

だつてわかっているからだ。

なら、最後に残った、俺にできることは一体なんだろう。

魔術も、体力も、戦闘もできない俺ができること。

それは、マシユのことを信じること。

令呪を使えば、確かに確実にマシユの宝具は発動できるだろう。ほぼ100パーセン

ト助かるだろう。

けれど、それじゃダメなんだ。

そうやって無理やり力を引き出すことは、今までの信頼を崩すことと何も変わらな

い。

だから、今だけは令呪を使うことなんて、俺にはできない。

だから――、

「信じてる」

「……はい」

「マシユならできるから」

「はい」

「怖くても、俺と一緒にいるから」

「はい！」

「だから……絶対に帰ろう！」

「っ！ はい!!」

怖いだろう、不安だろう。

あんな暴力も生ぬるい死の奔流を前に、一人で耐え続けるのは、想像もつかないような胆力が要るんだろう。

実際にあれを受けていない俺が、理解することなんておこがましい。同情なんて、するべきじゃない。

だから俺に、あれをどうにかしろなんてことは口が裂けても言えることじゃない。本当の恐怖を知らないのに、どの口がって言われればそれでおしまいだ。

けれど、守られる側として、俺は、俺が、守ってくれているマシユのことを信じることは、きつと間違っていない。

—— だから、例えばどうなとうと、俺は俺にできることを全うするんだ。

「私……は、絶対に……守ってみせる……。所長も、先輩も……だから——」

「—— 見ていてください、マスター!!」

意思は決定した。

はじめは弱気で、確かに恐怖が心にあつたのだろう。

けれど、今の言葉で、完全にそれは払拭していた。

「ああああああああああ
!!!!!!」
吼える。

気高くも、静かに、雄たけびを上げて、後ろにいる俺達を守ろうと、必死に踏ん張ってみせる。

けれど、それに比例するかのようには、黒い奔流は更に勢いも増す。

「ハアアアアアアアアア!!!」

「ああああああああああ!!!」

攻めと守り。両者はその鉄壁の意思を以って互角のせめぎ合いを演出している。

そこに誰かは必要とせず、それはクー・フリーンも、リムルでさえも手出しを許さない。
い。

純粹な二人の戦いだった。

「ぐっ……」

けれど限界は着実に近づいていた。

先に膝を折ったのは、マシユの方だ。

「ううう……!!!」

膝をついても、盾を離すことだけはしない。

その腕、体、足、全てを使ってその奔流を受け止め続ける。

「マシユ……」

絶対にここだけは通さないという意志だけで留めているような、ギリギリの状態だった。

けれど、それでも俺は。

「俺は、最後まで自分のサーヴァントを信じる」

「——！」

今この瞬間、例え負けたとしても俺は誇りを持って『全力で向き合った』って、胸を張って言える。

「……たい……」

「マシユ？」

「ぜつたい……死なせません。私は……あなたを……皆さんを——」

「——守り……ます！」

再びマシユは力を入れ直すように、ゆっくりと立ち上がる。

けれども、やはりそれは、気持ちだけではどうにもならない一つの現実に過ぎなかった。

セイバーの勢いは依然変わりない。

最早それは痛々しいまでに無力だった。

でもその高潔な決意は、信念は、本物だった。

——だからだろうか。

「……………!!」

マシユの大盾が応えるように光った気がしたのは。

「は……………ああああああああああ!!」

やがて光は大盾を補強するように広がって、幻想のような壁を出現させる。

それはセイバーの宝具を完璧に防いで見せた。

「これが……………宝具……………?」

「はあ……………はあ……………」

「面白い、よく防いだと褒めてやろう……………だが——」

マシユの宝具でセイバーの宝具は防がれた。けれど当のマシユは肩で息をする程に

消耗が激しい。

「クソツ、マズイ」

「大丈夫だよ、クー・フリーン。後は——リムルが」

慌てるクー・フリーンをなだめて、俺は笑みを浮かべた。

俺は、いや俺達はしっかりとリムルの期待に応えることが出来た。

だからこそ、俺の事を信じてくれたリムルという切り札を今ここで切る。

俺はリムルのマスターで、リムルは俺のサーヴァント。

マスターである俺は、サーヴァントであるリムルのサポートを最大限しなくちゃならない。

マシユへのサポートは、寄り添う事。

リムルへのサポートは――。

「切り札として、使いどころを見極めること」

それは決意とともにその証を示す。俺のマスターとしての決意が、戦う意思が、『令呪』という形を以て紅く輝いた。

誰に頼る訳でもなく、俺自身が仲間と共に前へ進むために。

「届け令呪よ!! リムルに勝利を!!」

これは俺の、弱い自分との決別だから。

「よくやったマスター、後は任せとけ」

快活に笑うリムルに、令呪の膨大な魔力が流れ込むのを感じながら酷い脱力感に俺はその場でへたり込む。

本当なら、セイバーの宝具が放たれようとしているこの状況でこんなことをするのは自殺するのと同じなのかもしれない。

けれど俺は不思議と勝利を確信していた。

きつとこれが、サーヴァントとマスターの理想の関係なんだと。

「さて、悪いなお嬢さん。俺のマスターからのお願いだ」

リムルが言葉を紡いだ瞬間に、勝敗は決した。

「ば……かな……!?!」

まさに、それは瞬き。ほんのわずかなコンマ数秒の合間に、セイバーの体は貫かれた。

「貴様……初め、から……加減して、いたのか……!?!」

「そういう訳じゃないんだけどな、ただちよつと魔素——魔力が足らなかつただけさ」

そういう終わると、リムルはいつの間にか手にしていた剣をセイバーから引き抜いた。

「いい勝負だったよ。またな、お嬢さん」

何が起こったか、それはリムル本人以外は誰も理解できなかった。

俺のすぐそばに立っていたリムルは、何の予備動作もなく、当たり前のように『決着』をセイバーに押し付けた。

「これ、ほど……とは。やはり貴様は……規格外、だ」

誰がどう見ても、圧倒的だった。

セイバーが『規格外』と評価するのも納得できるほどに、リムルはただ一人、この場

に集まった誰よりも余裕を持っていた。

それは俺にマスターの何たるかを論してくれたことからわかることだ。

マシユとは、一緒に歩むパートナー^{相棒}として。

リムルとは、ここぞという時のジョーカー^{切り札}として。

この短い戦いを通して、俺との関係を完全に確立できたのは他でもない、リムルのお陰。

例え今後どんなことが起きようとも、俺はこの瞬間のことを生涯忘れない。そんな漠然とした確信であつたりとか、確証であつたりする曖昧な、けれどとても大切な『自分』を、今日この日に初めて手にしたんだ。

「……聖杯を、守り通す気でいたが、貴様のような輩がいたとは……想定外だった」
空いた穴から血を流し、消滅寸前のセイバーは振り絞るように、最後にこちらを、今までにないほど優しい瞳で見つめて――、

「グラウンドオーダー……、聖杯を巡る戦い……は、始まったばかりだ……。この先の……戦い、は……苛烈を極める、だろう……」

そして、消えていった。

「おいテメエ、そりやどういう意味――ウオオオ!?!」

それと同時に、クー・フリーンの体も光に包まれ始める。

「クソツ、ここで退去かよ。……まあいい、おいボウズ。次に召喚する時は槍を持った俺を呼んでくれ。今回の戦いはリムルのやつにお株を奪われたが、槍を持った俺なら負けねえからよ」

そういつて朗らかに笑っていた。

「……うん、そうする」

だから、俺もクー・フリーンの心意気に応えるように、笑って見送ることにした。

勿論、急なことで吃驚はしたけど、どうせなら後悔をしないよう、きちんと納得する形で別れたかったから。

「じゃあ、頼んだぜボウズ」

クー・フリーンもセイバーと同様、光となつて消えていく。

ここに、この特異点Fで行われた聖杯戦争は、最後まで生き残っていたクー・フリーンを勝者としてその幕を下ろした。

「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ」

そう、聖杯戦争は、終わった。

「レフ……ああ、レフ、レフ、生きていたのね！」
でも俺たちの物語は、^{オーダー}まだ始まってすらいない。